



ハイライフアンケート調査結果を読む 第五回

生活意識に大きな世代ギャップが…。
デジタル育ちとアナログ育ちの世代の格差は歴然

2011年3月23日

■執筆:マーケット・プレイス・オフィス代表 立澤芳男(たつざわよしお)

■流通系企業の出店リサーチ・店舗コンセプトの企画立案/都市・消費・世代に関するマーケティングの情報収集と分析

■現ハイライフ研究所主任研究員/クレディセゾンアドバイザー

■元「アクロス」編集長(パルコ)/著書「百万人の時代」(高木書房)ほか

ハイライフ研究所が実施した「都市生活調査」(2010年10月実施)の結果を元に、既存データも活用し現在の生活者の生活行動や生活意識の実際を見ます。第5回では、大きく異なる世代間の生活意識・価値観のギャップがテーマです。

生涯、自分の組織が安定で給料右肩上がり、退職金もたくさんもらえ、老後は年金生活…。50歳代以上中高年世代の労働者の労働価値観は、長い間まさにこのとおりだったわけですが、バブル崩壊という経済状況の大きな変化を境に、50代以上と20～30代の若者世代(社会人になった団塊世代の子供)の労働者としては、意識や価値観が180度違う。

父(団塊世代、58歳)と子(32歳)ですら、労働に対する価値観のギャップだけは、絶対に埋まらない。尊敬する父親ではあるが、労働に対する価値観や意識だけは、「寄らば大樹の陰」という基本価値観が長い期間を経て形成されているので、それを今更変えるのは無理であらう。少なくとも、25年前の若者に比べて、現在の若者は、会社への信用がすごく低下している。ゆえに、忠誠心も低下している。終身雇用や右肩上がりの給料、といった従来のものにとって代わる新しいインセンティブが若者世代には不可欠になっている。

前回のレポートでは、「都市生活調査」を男女の生活意識ギャップという切り口でまとめましたが、今回はデジタル情報社会で育った現在の若者世代(20～35歳)とアナログ情報優位社会で育った中高年世代(主として団塊世代の50～64歳)との生活意識ギャップが、現在の社会観、収入や消費の考え方、情報の取り方などどのような生活シーンでみられるのかを追った。

◆都市生活調査サンプル数					
	調査数	未婚	年収	住宅ローン	
TOTAL	1800	31.1%	622万円	有 38.2%	
20～34歳	男性	244	77.5	595	32.8
	女性	227	66.5	607	33.9
50～64歳	男性	232	5.2	710	40.1
	女性	246	3.3	658	25.6

第5回 都市生活者の生活意識/分析レポート目次

デジタル育ちとアナログ育ちの世代の意識ギャップは歴然

<はじめに> 「所得格差」もさる事ながら「世代の意識格差」も大問題化 (p.2)

1. 現在の生活や社会に関する生活意識の世代ギャップを見る (p.3)
2. 収入に関する生活意識の世代ギャップを見る (p.5)
3. 資産や貯蓄に関する生活意識の世代ギャップを見る (p.7)
4. 消費ビヘイビアに関する生活意識の世代ギャップを見る (p.9)
5. 情報に関する生活意識の世代ギャップを見る (p.10)
6. 生活の不安に関する意識の世代ギャップを見る (p.13)

<執筆者メモ> (p.15)

若者世代と団塊中高年世代との生活意識に大きなギャップが……。 デジタル育ちとアナログ育ちの世代の意識ギャップは歴然

はじめに—「所得格差」もさる事ながら「世代の意識格差」も大問題化

世代間の格差については、日本社会が平等かつ均質で、一億総中流と言われていた時期（高度成長期からその後の安定成長期頃まで）においては、所得面での格差社会が問題になることはなかったが、バブル期に主に株価や地価の上昇（資産インフレ）を背景として「持てる者」と「持たざる者」との資産面での格差が拡大し、勤労という個人の努力とは無関係に格差が拡大したとして問題視されることが多くなった。その後、バブル崩壊による資産デフレの進行とともに資産面での格差は縮小している。

しかし、2000年代に入ると新たな格差社会がテーマとして取り上げられるようになった。企業利益・賃金の増加のアンバランス（1997年から2007年の間に、企業の経常利益は28兆円から53兆円に増加したが、従業員給与は147兆円から125兆円に減少している）がテーマとなる。こうした中で、正規雇用者の絞り込みなどを伴う雇用形態の変化や業績・成果主義的な賃金・処遇制度が広がり、賃金・所得の格差拡大傾向が進んできた。

一方で、少子高齢社会に突入した90年代から、その進行とともに経済と税制や社会保障による再分配から生じる経済格差が問題は未解決のまま拡大し続けているが、数字上では捉えにくい格差問題が底辺を這っていた。この20年間で、少子世代である平成生まれも社会人になり、一方でアナログで育った団塊世代高齢者が激増するなど、少子高齢化が進行し、その世代間の生活意識や行動の差異がことあるごとに顕在化し始めている。史上最大のスピードで少子高齢社会が出現し若い人と老人の対立的関係を生み出すことになった。

世代の格差が社会的に発生するのは、老人が大量に増えるときである。老人になると収入が増える機会が激減する一方で、健康を害するなどリスクが高まる。もちろん老人には一方で、「子供がいる・いない」「家がある・無い」「蓄えがある・無い」といった個人的状況の違いが「挽回のしようのない」世代内格差として発生する。

年金や社会保険問題などの基本的な所在は少子高齢社会という人口構造にあるが、増え続ける高齢者と減少する若者世代が同居異夢ではないが社会に同居するわけで、生活の行動や価値観の違いが様々な生活シーンで顕在化する。将来の社会もさることながら現実の生活（出産、結婚、労働、消費など）での世代間の生活意識ギャップは大きな社会問題になっている。

加えて、1990年代以降、インターネットなどのコンピュータネットワーク（情報技術）が普及するにつれて、パソコンなどの情報機器の操作に習熟していないことや、情報機器そのものを持っていないことは、社会的に大きな不利として働くようになり、世代間での情報格差が生じている。中高年など、長い間情報機器がない環境で過ごしてきたため、情報機器に対する拒絶反応（コンピュータアレルギー）により情報機器を利用しない（利用法のわからない）者など年齢による格差も問題となっている。

その意味では、現在60歳代になった団塊世代で膨れ上がる中高年と若い世代の現在の生活意識を比較することで、世代間ギャップを発見し、実感的な社会格差がどのような分野で見られるのか確認しておくことが重要と思われる。

**団塊ジュニアを中心とする若者世代(20~34歳)と
団塊世代を中心とする中高年世代(50~64歳)との世代ギャップを探る**

1 現在の生活や社会に関する生活意識の世代ギャップを見る

若者も中高年も現在の生活には満足だが、「社会」に対しは不満いっぱい。
社会が不平等であることや格差社会であることに関しては共通の認識を持っている

1) 現在の生活満足度

おおむね、若者世代も中高年も「現在の生活満足度」は高いが、若者世代女性は満足が多く、若者男性は不満が多い。中高年女性は若者女性より低いが高中年や若者男性に比べ満足度は高い。

		現在の生活満足度					
		満 足	やや満足	満足(やや含む)	やや不満	不 満	不満(やや含む)
20~34 歳	男性	18.0	50.0	68.0	27.0	4.9	31.9
	女性	12.3	64.8	77.1	18.9	4.0	22.9
50~64 歳	男性	15.9	53.9	69.8	24.6	5.6	30.2
	女性	15.4	59.3	74.7	23.2	2.0	25.2

2) 現在の幸せ感・幸福感(理想=100点満点)と現在の「生活水準」

中高年世代男女は70点台。若者世代で女性は70.5点、男性は64.9点で男女に格差

		現在の幸せ感・幸福感	現在の生活水準			
		平均(点)	中より上	中の中	中より下	(うち下)
20~34 歳	男性	64.9	20.9	48.8	30.4	7.0
	女性	70.5	15.9	56.8	27.3	2.2
50~64 歳	男性	69.3	18.5	47.8	33.6	4.7
	女性	72.8	17.9	58.1	23.9	2.4

3) 現在の「社会」に対する満足度

社会に対する「満足度」は世代及び男女に差はないが、両世代ともに「不満」が70%以上も

		現在の「社会」満足度					
		満 足	やや満足	満足(やや含む)	やや不満	不 満	不満(やや含む)
20~34 歳	男性	0.4	24.2	24.6	54.9	20.5	75.4
	女性	0.4	26.9	27.3	57.7	15.0	72.7
50~64 歳	男性	2.2	21.1	23.3	60.8	15.9	76.7
	女性	0.4	25.6	26.0	61.4	12.6	74.0

4) 世の中は平等だと思うのか

「平等」か「不平等」かについては、中高年も若者世代も「不平等」と思う人が70%を超え圧倒的に多い。

「平等」であると思う人は少ないが、世代で見ると中高年世代が若者世代よりも若干高い。

世代を超えて女性は男性よりも「不平等」感が強い

		世の中は平等だと思うのか						
		A:平等だと思う	B:どちらかといえば平等だと思う	平等(A+B)	C:どちらかといえば不平等だと思う	D:不平等だと思う	不平等(C+D)	わからない
20~34歳	男性	2.5	19.3	21.8	39.8	32.8	72.6	5.7
	女性	0	12.3	12.3	47.1	35.2	82.3	5.3
50~64歳	男性	0.9	25.4	26.3	41.8	28.9	70.7	3
	女性	0.8	15.4	16.2	59.8	19.1	78.9	4.9

5) 不平等だと思うもの(MA)

世代的には「不平等だと思うもの」は内容ではそれほど違いはないが、中高年世代は「年金・健康保険など社会保障の負担と給付」、若者世代は「雇用や就職」、がそれぞれ50%台を超えてトップに挙がっている。

		不平等だと思うもの(MA)					
		年金・健康保険など社会保障の負担と給付	税負担と受ける行政サービスの質・量	雇用や就職	教育機会	資産	特に不平等だと思うものはない
20~34歳	男性	59.8	44.3	56.6	23.4	34.4	9.8
	女性	65.2	53.3	67.8	36.6	32.6	5.7
50~64歳	男性	69.4	62.1	58.2	28.9	28.9	6.0
	女性	78.0	64.2	64.2	32.1	23.2	4.1

6) 今の社会は、格差が広がっている

両世代とも80%以上が「今の社会は、格差が広がっている」としているが、中高何世代では男女ともに90%を超える。中高年世代は、日本の中流社会の核世代であっただけに現在に社会への目は厳しい。

		今の社会は、格差が広がっている						
		A:そう思う	B:ややそう思う	思う(A+B)	C:あまりそう思わない	D:そう思わない	思わない(C+D)	わからない
20~34歳	男性	35.7	44.7	80.4	12.7	2.9	15.6	4.1
	女性	43.2	43.2	86.4	8.4	0.4	8.8	4.8
50~64歳	男性	44.8	45.7	90.5	4.7	2.6	7.3	2.2
	女性	42.3	50.8	93.1	5.3	0.8	6.1	0.8

2 収入に関する生活意識の世代ギャップを見る

不安定な収入は共通の悩み。補填方法には中高年は預貯金取り崩し、若者は支出抑制

政府の発表によると、国の借金が増える一方、個人金融資産の約6割を60歳以上の高齢世帯が保有しており、将来は働く世代の負担が大幅に増えることが見込まれているとしている。「生まれた年代によって税負担などに差がある」とする「世代間格差」を指摘する声は少なくない。

過去人口が増えている時から、日本は基本的に年功賃金。若い時は安く働いて、企業の中核を担う30代になって生産性が一番高くなる。この時点では給料が抑制されていて、後に取り返すというメカニズムになっている。これは人口のピラミッドが『上に凸』、つまり若い世代が多くて、高齢者が少ない時にはすごく有効。しかし、『下に凸』逆ピラミッドになってしまうと、日本の年功賃金システムが、逆に作用してしまう。中高年が多くなってしまった企業では、賃金が圧迫されている。限られた賃金配分しかない。当然若い世代にシワ寄せがくる。まさに年金と同じ構図がここにも見られる。

では、少子高齢化社会での中高年世代と若者世代の経済上の所得格差が生活格差としてどのようになっているのか、そしてその所得格差があるということを前提として収入や資産あるいは貯蓄、あるいは消費の面でどのような意識が働いているのかをチェックする。一体、どのような意識ギャップが見られるのか。

1) 収入の満足度

現在の収入に関しては、若者世代のほうが中高年世代よりも不満度が高い。満足度については、若者世代女性と中高年世代女性が比較的高い数字となっている。

		収入の満足度(収入のある者のみ)							なんとも いえない
		調査数	A:満足して いる	B:やや満足 している	満足 (A+B)	c:やや不 満	D:不満	不満 (C+D)	
TOTAL		1392	4.1	19.0	23.1	37.1	25.8	62.9	14.1
20~34歳	男性	211	2.4	13.3	15.7	40.3	30.3	70.6	13.7
	女性	158	5.1	19.6	24.7	34.2	25.9	60.1	15.2
50~64歳	男性	221	5.0	14.9	19.9	39.4	29.0	68.4	11.8
	女性	169	6.5	21.9	28.4	37.3	18.9	56.2	15.4

2) 今後の収入の増減

今後の収入については、一般的に50%前後の人が「あまり変わらない」としている。

しかし、若者世代は「増えていく」とすると答えている人は男性で37.4%女性で20.3%となっているが、中高年世代では一桁の5%前後である。「今後の収入」についての世代間の意識ギャップは高い。

		今後の収入の増減(収入のある者のみ)		
		増えていくと思う	(あまり)変わらないと思う	減っていくと思う
TOTAL		15.7	52.7	31.6
20~34歳	男性	37.4	54.5	8.1
	女性	20.9	65.2	13.9
50~64歳	男性	7.2	43.0	49.8
	女性	5.3	49.7	45.0

3) 収入と支出のバランス

収入と支出のバランス(「収入のある者」のみ)を見ると、両世代とも 50%前後でバランスがとられているが、若者世代は 30%前後が「収入が支出を上回っている」のに対し中高年世代は 20%台以下となっている。また、「支出が収入を上回っている」とする中高年世代が 30%台を超え、家計は「赤字」の状況になっている。

		収入と支出のバランス(「収入のある者」のみ)			
		調査数	収入が支出を上回っている	収入と支出は同じくらい	支出が収入を上回っている
TOTAL		1392	20.4	50.7	28.9
20~34歳	男性	211	28.0	58.0	14.0
	女性	158	32.0	49.0	19.0
50~64歳	男性	221	16.0	45.0	39.0
	女性	169	18.0	49.0	33.0

4) 補填方法(MA)／支出が収入を上回っている者」のみ

補填方法については、「預貯金・金融資産の取り崩し」が圧倒的に多いが、世代格差は大きく、中高年世代は 60~70%台、若者世代は 35%台になっている。貯蓄額が高い世代と低い世代の差がそこに見られるが、若い時代から貯蓄志向が強かった中高年世代の特徴がここ見られる。補填方法について二番目に行われたのは「出費の節約」であるが、若者世代が高い数字を示している。補填方法は世代によって方法・手段は世代によっても違いまた男女によって大きな違いを見せている。中高年の借金(キャッシング等)志向や若い世代の「パラサイト」志向など生活意識の違いも見られた。

補填方法(MA)「支出が収入を上回っている者」のみ<>は調査数					
	TOTAL	20~34歳		50~64歳	
		男性<30>	女性<30>	男性<86>	女性<56>
預貯金・金融資産の取り崩し	60.7	36.7	36.7	61.6	76.8
出費の節約	36.1	23.3	36.7	29.1	41.1
配偶者が働きに出る	27.9	13.3	10.0	50.0	10.7
親(子)などからの援助	18.9	40.0	36.7	9.3	19.6
アルバイトやサイドビジネス	13.9	16.7	26.7	19.8	8.9
借金(キャッシング等)	12.2	10	20	17.4	3.6
金融資産の運用	1.5	0	0	3.5	1.8
不動産資産の活用	0.7	0	0	2.3	0

3 資産や貯蓄に関する生活意識の世代ギャップを見る

経済的ゆとりはないが、若者は「雇用などの将来不安」、中高年は「老後」の備えで貯蓄する

日本では世代間に金融資産の偏在がある。50歳代以上が日本の金融資産をほとんど持っている。特に顕著なのは20代の金融資産の所持率の落ち込みが前より大きくなっており、30代と20代をあわせても5.7%しか持っていない。金融資産は極端に偏在している。20代の金融資産が減っているのは、最近の雇用の不安定化がこの層を直撃しているからだ。もともと終身雇用制のもとでは20代は安く働かせて、これを働き盛りで取り返す仕組みになっており、定年頃の中高年は給与を多めに貰っている。長期的にバランスをとる仕組みなので、いったんこれが崩れると長期(40年以上)に渡って影響がでる。キャリア形成初期に思い切り経験を積むことができないと、その後のキャリアに大きな影響を及ぼす。この影響は多分個人のキャリア形成というよりも、組織全体の学習効率を著しく毀損するだろうというものだ。資産があるないは経済的ゆとりと意識とリンクしているが、世代間や男女間による格差より個人間の格差があるように見える。

1) 経済的なゆとり

「経済的なゆとりなし」とする人が中高年世代、若者世代ともに70%前後となっている。

強いて「ゆとりあり」をみると若者世代の女性と中高年世代の男性が30%となっており、優良企業の中高年幹部社員もしくはキャリアのある女性に限られているようだ。

経済的なゆとり		調査数	A:ゆとりがある	B:ややゆとりがある	ゆとりあり (A+B)	C:あまりゆとりはない	D:ゆとりはない	ゆとりなし (C+D)
20~34歳	男性	244	2.0	24.2	26.2	56.1	17.6	73.7
	女性	227	0.9	30.0	30.9	48.9	20.3	69.2
50~64歳	男性	232	1.7	22.0	23.7	45.7	30.6	76.3
	女性	246	2.4	27.6	30.0	48.0	22.0	70.0

2) 現在利用している資産運用手段(MA)

「資産運用しているものあり」が多いのは中高年世代(約60%)、少ないのは若者世代(約85%)とはっきり分かれている。現在利用している資産運用手段としては中高年世代は「個人年金保険」「株式」「投資信託(債権型)」10から20%台でベスト3となっている。利用率としては低いが、「投資信託(株式型)」や「外貨預金(外貨定期預金を含む)」は若者世代の運用手段として注目を集めている。

現在利用している資産運用手段(MA)	20~34歳		50~64歳	
	男性	女性	男性	女性
資産運用・投資しているものはない	88.5	85.9	59.1	59.3
・個人年金保険	5.3	7.5	22.4	23.6
・株式	3.3	2.2	19.4	14.2
・投資信託(債権型)	0.4	1.3	10.3	12.6
・国債	0.8	0.4	8.6	9.3
・投資信託(株式型)	1.6	0.9	6.9	6.9
・外貨預金(外貨定期預金を含む)	0.4	2.6	3.0	6.1

不動産・株式・投資信託の毎月の定期購入・社債・不動産投資信託(REIT)・金(ゴールド)・外国為替証拠金取引(FXなど)・商品先物取引・その他 についての資産運用は、いずれの世代でも5%未満で利用

3)貯蓄について

何かの形で「貯蓄をしている」のは中高年世代に多く、「毎月額を決めて貯蓄している」「毎月ではないが貯蓄をしている」では、若者世代よりも男女ともに約5%ポイントほど高い。中高年世代の貯蓄志向の強さが窺えるが、若者世代も「額は決めてないが毎月貯蓄をしている」が約25%に達しており貯蓄の必要性を強く認識しはじめているようだ。

		貯蓄について				
		調査数	毎月額を決めて貯蓄している	額は決めてないが毎月貯蓄をしている	毎月ではないが貯蓄をしている	貯蓄はしてない
TOTAL		1800	23.1	15.6	33.9	27.5
20～34歳	男性	244	17.2	25.8	22.5	34.4
	女性	227	20.7	24.2	32.6	22.5
50～64歳	男性	232	24.1	10.8	34.5	30.6
	女性	246	25.2	14.6	41.1	19.1

4)貯蓄理由(MA)について

貯蓄理由については中高年世代は「老後に備えて」「予定外の支出に備えて」「旅行資金」が上位となり、若者世代は「予定外の支出に備えて」「雇用などの将来不安に備えて」「子どもの教育資金」が上位となるなど、其々の世代のライフステージに見合った理由があるようだ。

若者世代の「雇用などの将来不安に備えて」が理由として上位にあり、また、高齢者でない中高年世代が「老後に備え」を上位にあげるなどは、不況からなかなか抜けきれない経済状況、高齢社会の到来など現実の厳しさ表している。

貯蓄理由(MA)／「貯蓄をしている」者のみ／()内は調査数					
	TOTAL	20～34歳		50～64歳	
	(1305)	男性(160)	女性(176)	男性(161)	女性(199)
子どもの教育資金	30.3	18.8	25.0	25.5	11.6
住宅の購入資金	6.1	9.4	9.1	3.7	2.0
車や家電等の耐久消費財の購入資金	12.8	16.3	10.2	11.2	11.6
旅行資金	18.4	13.8	26.7	14.3	23.1
結婚資金	6.0	15.0	22.2	1.2	2.0
雇用などの将来不安に備えて	19.6	25.6	30.7	16.8	15.6
老後に備えて	48.2	14.4	26.7	72.7	73.9
予定外の支出に備えて	49.6	40.0	51.1	47.2	60.8
その他	0.2	0.6	0	0	0
何となく(特に理由はない)	9.5	21.3	11.9	3.1	4.5

4 消費ビヘイビアに関する生活意識の世代ギャップを見る

低価格商品購入に慣れ親しむが、情報収集先ありきの若者消費、品質にこだわる中高年消費

1) 買い物に対する意識・態度(MA)

買い物において中高年と若者世代のギャップが大きい消費意識・態度をみると、買い物好きで、新しい商品や話題商品を購入する若者世代に対し、買い物に慎重で品質にこだわるといった中高年世代との違いが見られた。自分の購入した商品の値段、ブランド、価格などの「情報収集」という点において対照的。

▼若者世代が優位とする買い物に対する意識・態度	20～34 歳		50～64 歳	
	男性	女性	男性	女性
値段が安ければ無名メーカーのものでも買う	47.5	51.1	43.5	32.9
何か買う時はいろいろ比較して買うことが多い	44.3	51.1	35.8	35.8
同じ買うのなら、高くても気に入ったものを買う	38.9	36.1	34.1	33.7
何か買う時は、あらかじめ調べてから買うことが多い	32.0	26.0	26.7	23.2
いつも同じメーカー・ブランドのものを買うことが多い	25.8	32.2	19.4	26.8
気に入ったものであれば、中古でも気にしないで買っている	25.8	20.3	16.8	17.5
新しい商品が出ると試しに買ってみることがある	23.4	36.6	18.5	32.9
欲しいものがあると無理しても買ってしまう	20.9	23.8	12.9	12.6
バーゲン品を買うことが多い	19.7	38.3	16.8	33.7
おまけや懸賞がついていると、その商品を買ってしまう	19.3	35.2	12.9	17.9
買い物はストレス解消になる	18.0	54.6	9.5	37.8
1円でも値段の安い店に買いに行く	16.4	16.3	10.8	10.2
▼中高年世代が優位とする意識と態度				
一流メーカー・一流ブランドの商品は信頼できる	21.3	19.4	27.6	30.1
買い物にはチラシを参考にする	17.2	25.1	35.8	56.5
品質管理、品質情報の提供がしっかりした店で買うことが多い	16.4	18.9	21.6	39
事前に買う商品をメモして買い物に行くことが多い	13.5	27.3	22.4	39.4

2) 電子マネーについて(MA)

小額決済の買い物で利用される電子マネーカードが急成長中であるが、いち早く飛びついたのが若者世代である。若者世代の使用率は男女ともに 70%台、中高年は 60%台まで普及している。利用理由は「現金」の代替的な意識が強い中高年世代と「時間・速さ」にこだわる若者世代とのギャップが見られる。

		電子マネー(MA)		電子マネー利用理由(MA)/ 電子マネー利用者のみ					
		使っている	特に使っているものはない	支払いが短時間で済む	小銭を用意しなくてよい	ポイントがたままる	手持ちのお金を気にしないで支払いができる	オシャレだから	特に理由はない
20～34 歳	男性	64.8	35.2	53.2	44.3	18.4	12.0	1.3	10.1
	女性	69.6	30.4	60.1	55.1	26.6	13.9	1.3	11.4
50～64 歳	男性	58.2	41.8	48.9	65.9	23.0	16.3	0.7	11.9
	女性	59.8	40.2	65.3	67.3	25.2	18.4	1.4	4.1

3)この1～2年で増えた支出(MA)／収入のある者のみ

「この1～2年で増えた支出」をみると両世代で共通するのは、「食料費」「通信費(携帯電話・インターネットを含む)」。若者世代が増やした支出項目は「趣味娯楽」「交際費」「衣料」「貯蓄」で中高年世代では「自家用車関連費(ガソリン代、保険、車検等を含む)」「保健医療費」となっているが、若者世代の「貯蓄」が注目される。買い物をしないで貯蓄するといった「若者の巣籠もり消費」志向がよくでている。

主な支出項目 この1～2年で増えた支出(MA)／<内は調査数		20～34歳		50～64歳	
		男性 (211)	女性 (158)	男性 (211)	女性 (158)
共通	食料費(外食費・給食費を含みます)	45.5	39.2	32.1	27.2
	通信費(携帯電話・インターネットを含む)	32.2	34.8	33.0	30.8
若者世代が増やした支出項目	趣味・娯楽費	29.4	34.8	14.0	15.4
	交際費	24.6	34.2	14.5	20.1
	交通費(電車・バス代、定期代、タクシー代等)	17.1	17.7	14.0	9.5
	衣料品・靴・バッグ等の購費	19.4	34.2	5.0	5.9
	貯蓄	10.4	14.6	6.3	5.3
中高年が増やした支出項目	自家用車関連費(ガソリン代、保険、車検等を含む)	27.0	14.6	21.7	21.3
	保健医療費	13.7	15.8	39.4	35.5
	教育費	16.1	11.4	27.1	16.6
	水道光熱費(電気・ガス・水道費)	18.5	19.0	26.2	26.0

5 情報に関する生活意識の世代ギャップを見る

インターネットを駆使する若者世代、アナログ情報にこだわる中高年世代。関心分野は拡散
1)情報についてあてはまるもの(MA)

情報に関して、インターネットによる受発信を重視する若者世代と、新聞や雑誌の情報を重視する中高年世代との違いがみられる。幼児から青年を迎える時期に、インターネット社会の進展があった若者と新聞やテレビなどマスコミが急膨張したころに育った中高年という世代の違いか。

情報についてあてはまるもので世代ギャップが大きいもの	20～34歳		50～64歳	
	男性	女性	男性	女性
わからないことがあるとすぐインターネットで調べる	57.4	63.0	41.8	26.4
いろいろな情報はインターネットで知ることが多い	51.6	40.5	30.6	11.8
1つのことを深く知りたい	25.4	20.7	12.1	10.2
マスコミよりくちコミの情報を信用するほう	21.7	29.1	11.2	17.5
わからないことがあるとすぐ人にきく	20.9	36.1	14.7	35.8
毎号買っている雑誌(週刊誌・マンガ誌を除く)がある	13.1	21.6	10.8	11.4
朝刊は必ず朝に読む	15.2	10.6	59.5	51.2
いろいろな情報は新聞・雑誌で知ることが多い	15.2	14.1	37.9	49.2
くちコミよりマスコミの情報を信用するほう	8.6	7.0	16.4	13.8

2) 関心のある情報分野(MA)

若者世代と中高年世代に「関心のある情報分野」を聞いたところ、若者世代の男性は「スポーツ」「趣味」、女性は「ファッション」「美容」、中高年世代の男性は「経済・景気」「政治」、女性は「健康」「旅行」が上位を占める。関心ある情報分野は世代別・男女別で大きな違いがみられるが、はっきりしているのは若者世代はエンターテインメント志向が強いということである。

関心のある情報分野(MA)／若者世代と中高年世代								
	20～34 歳				50～64 歳			
	男性		女性		男性		女性	
1位	スポーツ	54.9	ファッション	67.8	経済・景気	69.4	健康	62.6
2位	趣味	55.3	食べ物・料理	63.4	政治	61.2	食べ物・料理	57.3
3位	経済・景気	46.7	美容	60.4	スポーツ	53.9	旅行	54.5
4位	政治	39.8	芸能	52.4	健康	41.4	経済・景気	41.1
5位	食べ物・料理	36.5	旅行	50.7	旅行	34.9	食べ歩き・グルメ	40.7
6位	ファッション	34.8	食べ歩き・グルメ	41.4	趣味	34.5	趣味	38.2
7位	新商品	29.9	趣味	39.6	老後	28.0	老後	34.6
8位	企業・市場・ビジネス	26.2	健康	39.2	企業・市場・ビジネス	27.6	医療	32.5
9位	芸能	25.8	新商品	35.7	食べ物・料理	23.3	政治	32.5
10位	旅行	23.8	教育・育児	33.0	医療	22.8	美容	30.1

3「パソコン」利用頻度とインターネット利用頻度

パソコン利用が毎日使っている人は若者世代男性は 61.9%、中高年世代男性は 59.9%、女性は若者世代は 47.1%、中高年は 25.6%となっており世代差よりも男女差が大きい。中高年女性は使っていないが 47.6%となっている。パソコン利用者のインターネット利用頻度を見ると同様の結果が見られる。

①パソコン利用頻度								
		殆ど毎日	週に2～3日	週に1日位	月に2～3日	それ以下	使っていない	平均(日／週)
20～34 歳	男性	61.9	14.3	4.5	4.5	0.8	10.7	4.25
	女性	47.1	22.5	7.5	4	1.8	14.1	3.56
50～64 歳	男性	59.9	6.5	5.2	2.6	1.7	22.8	3.93
	女性	25.6	11.8	7.7	2.4	2.4	47.6	1.96

②「パソコン」でのインターネット利用頻度／パソコン利用者							
		殆ど毎日	週に2～3日	週に1日位	月に2～3日	それ以下	平均利用(日／週)
20～34 歳	男性	57.4	14.8	4.9	5.7	0.8	3.98
	女性	42.3	24.7	9.3	4.4	2.2	3.34
50～64 歳	男性	52.2	10.8	6	3.9	1.3	3.57
	女性	19.9	11.8	9.8	3.7	2.8	1.63

4) パソコンのプライベートでの利用内容(MA)

「ブログ・ホームページなどの閲覧・情報検索」については若者世代、中高年世代はほぼ同様だが、エンターテインメント情報・ネット交流については若者世代が大いに利用しているが、中高世代はまだ利用は少ない。一方、ワープロとしての利用や金融取引については若者世代より積極的に利用している。

パソコンのプライベートでの利用内容(MA)／(「パソコン」利用者に)					
		20～34 歳		50～64 歳	
		男性	女性	男性	女性
共通	ブログ・ホームページなどの閲覧・情報検索	76.1	80.5	68.2	65.9
世代ギャップ が大きい	音楽・映像のダウンロード・編集・鑑賞	51.8	56.4	29.6	14.7
	ゲーム	33.0	28.7	27.9	24.8
	チャット・掲示板・SNSへの参加	17.0	18.5	4.5	3.1
	ブログ・ホームページなどの作成・更新	12.8	20.5	8.4	4.7
	ツイッターへの参加	8.3	9.7	2.8	0.8
	ワープロ・表計算・家計簿	24.8	21.0	48.6	28.7
	金融取引(銀行、証券など)	4.6	7.7	12.8	8.5

5) 携帯電話のインターネット利用内容(MA)

Eメール利用は若者世代と中高年世代はともに50%台と利用率は高い。Eメールは中高年世代の利用内容では第一位に上がっているが、Eメール以外では、「ブログ・ホームページなどの閲覧・情報検索」が第2位となっており、「航空券、乗車券などのチケット予約」については若者世代を上回っている。

若者世代の利用内容は多様に利用され、自由自在に携帯電話を利用している。しかし、中高年はその多様な利用内容について追従する様子は見られない。

携帯電話のインターネット利用内容(MA)／(「携帯電話でのインターネット」利用者に)					
		20～34 歳		50～64 歳	
		男性	女性	男性	女性
共通	Eメール	51.8	55.2	51.3	55.6
世代ギャップ が大きい	ブログ・ホームページなどの閲覧・情報検索	71.0	70.0	42.3	39.7
	ゲーム	46.1	35.0	7.7	6.3
	アプリのダウンロード	33.7	28.6	17.9	11.1
	音楽・映像のダウンロード・鑑賞	31.1	28.6	12.8	25.4
	チャット・掲示板・SNSへの参加	21.2	17.7	1.3	3.2
	携帯クーポンの取得	21.2	48.3	11.5	30.2
	インターネットショッピング(物の購入)	18.7	25.6	5.1	3.2
	インターネットオークション	18.1	14.3	5.1	3.2
	ブログ・ホームページなどの作成・更新	12.4	21.2	2.6	1.6
	ツイッターへの参加	9.3	11.8	2.6	0.0
	航空券、乗車券などのチケット予約	5.7	8.4	16.7	4.8

6 生活の不安に関する意識の世代ギャップを見る

若者は「雇用」、中高年は「老後」に大不安。将来見通しは楽観的な若者、悲観的な中高年に違い

1) 生活の不安点(MA)

若者世代と中高年世代が共通してあげる生活の不安点は、「収入」「景気・株価」「税金の使われ方」がベスト3、若者世代の主な不安は「雇用」「犯罪・通り魔・暴力」「戦争・紛争・テロ」、中高年の主な不安は「年金制度」「親の介護」「老後の生活設計」が各々ベスト3となっており、各々の世代のライフステージならではの不安が上がっている。不安の内容で若者世代の意識を見ると、保守的というか安全志向の強い意識が前面に出ている。

	生活の不安点(MA)	20～34 歳		50～64 歳	
		男性	女性	男性	女性
世代が共通する不安	収入	66.8	71.4	65.1	54.9
	景気・株価	43.4	50.2	44.4	39.0
	税金の使われ方	40.2	46.3	37.9	38.6
	地震・台風・洪水などの自然災害	27.9	49.8	38.8	40.7
	食の安心・安全	23.4	30.8	30.2	40.7
	異常気象	32.4	46.7	38.4	46.3
	政治	39.3	32.6	33.2	24.0
	いざという時の保険・補償	23.0	37.9	34.9	36.6
	子どもの将来	15.2	30.0	31.0	21.5
	環境問題	23.4	31.3	28.0	32.5
	住宅の安全性(耐震性や防犯性など)	13.9	24.2	24.6	28.0
	教育費	11.5	26.0	15.1	8.1
	災害対策	16.4	24.7	20.7	19.9
若者世代の主な不安	雇用	46.7	44.5	31.5	19.9
	犯罪・通り魔・暴力	27.0	41.4	19.4	23.6
	戦争・紛争・テロ	22.1	25.6	16.4	15.0
	子どもの遊び仲間・いじめ	10.7	25.1	6.5	5.3
	個人情報の流出	13.1	15.4	9.1	13.0
	出産・育児	9.4	34.8	1.7	0.8
	小児医療体制	5.7	15.0	4.7	3.3
中高年世代の主な不安	年金制度	32.8	36.6	51.7	57.3
	親の介護	20.5	33.9	34.9	39.8
	老後の生活設計	14.3	23.8	44.0	53.3
	高齢者医療	12.3	18.5	38.8	43.5
	配偶者の健康・介護	9.0	16.7	40.1	45.5
	福祉・介護保険	13.1	17.2	30.6	35.4
	食料自給率・食料問題	14.8	18.5	23.3	26.0

2) 社会福祉や年金と税金の負担についての考え方

若い世代と中高年世代で考え方が大きく分かれるのは、社会福祉や年金と税金の負担についての考え方である。増税など負担増で福祉年金水準アップを主張する中高年世代と水準維持しつつ負担減を望んだり、水準が下がっても負担を軽くしたいという若者世代との考え方のギャップは、高齢化社会では抜き差しならぬ世代格差となっている。

		福祉や年金の水準が多少低下しても税などの負担は軽いほうがよい	税などの負担が多少増えども福祉や年金の水準をあげたほうがよい	福祉や年金はあげてほしいが税等負担が増えるなら今と同じでよい	その他(無回答含む)
20~34 歳	男性	16.4	38.9	44.7	0
	女性	15.0	37.4	47.6	0
50~64 歳	男性	6.9	50.0	43.1	0
	女性	8.1	45.5	45.9	0.4

3) 2~3年後の生活見通し

世代意識ギャップが様々な生活分野でみられたが、「2~3年後の生活見通し」について聞いてみると、「良好だ」とする若者世代は男女ともに約 50%であるが中高年世代は 20%未満であり、「悪化する」は中高年世代は男女ともに約 30%だが若者で世代では約 10%台となっている。今後 2, 3 年の生活については、楽観的な若者に対し悲観的な中高年という構図がはっきり見て取れる。

		2~3年後の生活見通し							
		調査数	A:良くなっていると思う	B:やや良くなっていると思う	良好 (A+B)	変わらないと思う	C:やや悪くなっている	D:悪くなっていると思う	悪化 (C+D)
20~34 歳	男性	244	16.4	30.7	47.1	43.9	7.4	1.6	9.0
	女性	227	16.7	28.2	44.9	44.5	7.5	3.1	10.6
50~64 歳	男性	232	3	16.4	19.4	40.9	28	11.6	39.6
	女性	246	4.5	12.6	17.1	54.5	24.4	4.1	28.5

4) 損をしていると思う年代(MA)

世代格差についてみてきたが最後に「損をしている世代」について聞いてみたが、当然自分の属する世代(年齢層)が最も損をしている世代という答えが上がっている。全体的には高齢者世代といわれる 60 代以上より、20, 30, 40 歳代が損をしているという意見が多かった。

		損をしていると思う年代(MA)									
		調査数	19歳以下	20代	30代	40代	50代	60代	70歳以上	損をしている年代はない	わからない
TOTAL		1800	17.1	31.9	37.8	33.6	22.7	12.5	6.5	1.7	24.7
20~34 歳	男性	244	26.2	48.8	43.0	23.0	12.7	8.6	7.0	1.6	24.6
	女性	227	17.2	43.2	41.4	24.2	16.3	6.2	6.6	0.9	30.4
50~64 歳	男性	232	16.4	29.7	30.2	34.9	44.4	17.2	5.2	2.2	17.7
	女性	246	8.9	28.5	34.6	32.5	40.7	24	2.8	1.2	24.8

執筆者メモ まとめ

巨大地震と大津波は日本にとって戦後最大の災害となりました。被害は連日数字が更新されていますが、3月21日現在の死亡者数は約9千人、死亡者及び不明者を合わせると2万人を超え、避難住民は約35万人となっています。未曾有、想定外の巨大地震と原発火災は日本の国土・社会の崩壊の危機をもたらすのではないかと大きな不安を与え、この不安を克服し復興に向かうべく住民たちは即立ち上がりました。しかし新聞テレビのニュースでその状況を見ると、流れるニュースは悲惨な高齢者の姿ばかりです。不安は深刻化するばかりです。すでに「少子高齢社会」となっている東北地方を、戦後最大の地震と津波が集中して襲ったことがその深刻さは増長させているのではないのでしょうか。

このような社会危機の中、本レポートは「生活意識の世代ギャップ」をテーマを取り上げました。そんなことを言っている場合ではないというおしかりを受けるかもしれませんが、今回の巨大地震から復興に立ち上がりつつある地域の救援活動を見ると、ほとんどが高齢者の多い地域です。若い世代の姿は見えません。頑張る中高年と女性と子供たちと悲惨な老人たちのみ目立ちます。若い世代はどこに行ったのでしょうか。

脱地方生活など、若者過疎化などそこに至るプロセスには、地域社会の経済的問題もあったのですが、おそらく親と子の生活意識ギャップも大きくかかわっていたと思われます。

世代格差のテーマですが、世代格差で最も顕著に表れているのは、所得格差と所得の再分配格差の問題です。これは比較した数字から生まれる世代格差で生活上でのリアル感はありません。世代格差の実感、現在の社会をどう見るのか、家族、結婚や子供についてどう考えているのか、情報とどう向き合うのか、などの考え方や受け止め方などに生活意識の世代格差を見ることができます。意識の世代ギャップに関しては、戦前生まれと戦後生まれ、テレビ放送開始以前と以降、東京オリンピック以前と以降、バブル経済の経験・崩壊以前と以降、あるいは、インターネット開始前後での世代の差がよく指摘されています。

その中で、最も興味深いのは、いま、団塊世代が60歳となった中高年世代と団塊の子供たちである団塊ジュニア30歳前後の若者世代との比較です。同年生まれ250万人の中でずっと成長しマスコミで育ち高齢者予備軍となった中高年世代、同年生まれ約150万人の中で育ちインターネット・携帯を駆使する団塊ジュニアの若者世代、この両世代の意識ギャップは「世紀のギャップ」といってもよいくらいです。

そしてさらに興味を引くのは、その両世代である、人口的に極端に多くなった中高年世代と経済成長の止まった社会に生きてきた現在の若者世代に同世代間の格差問題が発生していることです。

収入が減る中高年世代は、配偶者の有無、子供の有無、収入・資産の有無、相続の有無、老人介護の有無でトータルでの生活意識はことごとく異なり、挽回のしようのない較差が固定化し、共通価値観は分散する。若者世代では、同世代の多くの人たちは、正規雇用の場を得られないとか、得られた人も、ひどい抑圧にさらされて、身体的、精神的に傷つけられる。この世代は「ロスジェネ」世代といわれますが、それはロスジェネではなく、「最も格差の激しい世代」と言うべきなのです。この「同じ世代の中の格差と対立」は、一生継続する。豊かな家庭に生まれた子供は、恵まれた教育を受けて、多くの遺産を受け継ぐことができるので、貧しい家庭に生まれた子供よりも有利である。このため、親の世代にできた格差が、次の世代にまで引き継がれることとなります。社会の世代格差が継続し続けるのです。公平な競争が損なわれてしまうこととなります。

話は戻りますが、高齢社会での復興は成長期にあった復興とは全く異なるものであり、今までのようなインフラ中心の地域復興を前提とするのではなく、新たな高齢化に対応した地域社会づくりを国是として推進すべきですが、その前に、世代意識ギャップをきちんと確認しておかないと〈世界初の良的高齢社会〉は砂上の楼閣になりかねません。

以上